

ちゃんと泣ける子に育てよう

親には子どもの感情を育てる義務がある



大河原美以
OHKAWARA MIKI

河出書房新社

大河原美以 著

河出書房新社、2005 年

ちゃんと泣ける子に育てよう

評者 山下淳一郎

東京学芸大学大学院

連合学校教育学研究科 博士課程

しばしば子どもは教室で、怒りや悲しみといった制御しきれぬ巨大な負のエネルギーを暴力や暴言というかたちで表現する。多くの場合、その子どもは怒られる。「どんな理由があっても手を出してはいけない」、「人が傷つくようなことを言うてはいけない」と。クラスの秩序は一見保たれたかに見える。しかし、彼のマグマのような負のエネルギーは、噴き出す道をふさがれ、その心の奥底に押し込められる。

本書の著者、臨床心理士の大河原美以は言う。「子どもが泣いたり、怒ったり、悲しんだりするのが当然の場面で、その感情の表出が歓迎されない状況が日常的に繰り返されてしまうと、子どものネガティブな感情が社会化されるチャンスが失われてしまう」のだと。怒りや悲しみは、人間ならば当然沸き起こる生理現象のひとつである。しかし、大人たちの前で「よい子」でい続けようとする子どもは、怒りや悲しみを素直に表出することができず、負の感情を封印する「解離」によってその感情を処理してしまうという。たしかに怒りや悲しみは時に破壊的で攻撃的な感情でもある。近年、アンガーマネジメントや感情コントロールという言葉が耳にするが、人の制御困難な情動や感情は円滑な日常生活を妨げるノイズとして、個人的に処理すべきものとなったかのようにある。しかし、本書の著者である大河原の意図は別のところにある。すなわち感情の問題は、それを飼いならす「個人」の問題ではなく、感情を受け止める他者との「関係性」の中に生起する問題だということである。本書の特徴的なタイトルには、「子どもの泣きに耐えられる大人」との関わりが子どもの成長には不可欠だという意味が込められている。

ふりかえってみると、日本の教育学で繰り返されてきた「発達を保障する」という言葉には、どこかポジティブな響きがなかったか。むしろ子どもとは、怒りや悲しみといった負の感情処理にこそ支援が必要な存在なのではないか。だとすれば、負の感情を適切な「社会化」のプロセスへと導く関わりこそ、「発達を保障する」ことのもうひとつの側面なのではないか。本書には「親は子どもの感情を育てる義務がある」というサブタイトルが付けられており、主な読者層は子どもをもつ親を想定しているようである。しかし、「人の迷惑をかえりみず」要求するエネルギーこそ子どもの「生きる力」である、という著者の冒頭のメッセージは、親のみならず、子どもの発達を保障する任にあるすべての大人に向けられたメッセージであろう。私たちはこのメッセージをどこまで真摯に受け止められるだろうか。